

和の伝統文化の吟詠道

詩吟

～吟詠道のご案内～

- ▶ 1. 詩吟とは
- ▶ 2. 吟じ方
- ▶ 3. 詩吟の理念
- ▶ 4. 講座参加について
- ▶ 5. 講師紹介
- ▶ 6. 詩吟の実演
- ▶ 7. 参考資料
- ▶ 8. 今後の展望

1. 詩吟とは

詩吟とは、中国や日本の作者によって作られた漢詩を日本ふうの読み方で吟じるものである。

漢詩を何らかの方法で歌うことはすでにあっただが、歌うものとして文化的な要素となったのは江戸時代である。江戸時代になると各藩が勉学の助けとして漢詩に素朴な節を付けて吟じさせたのが始まりである。これが明治以降日本全国に広まったものである。大正から各流派の祖となった吟詠家が活動し、現在の諸流派の祖となった。

戦後は、古今の名詩を味わい、美しい日本語をもって表現するという側面が前面に出されるようになった。このため、素読から始まった詩吟も、精神面に加え、アクセントや音楽性が重視されるようになっていく。また、健康志向から、腹式呼吸による発声という側面が取り上げられることもある。

2. 吟じ方

独吟といい、一人で吟ずるのが本来の姿であるが、複数人で順に吟ずる連吟や、合唱のように声を合わせる合吟といったかたちでの吟詠もよく行われている。

吟詠に剣舞、あるいは詩舞を伴うこともある。
また、無伴奏が基本であるが、琴や尺八による伴奏を付けることもあり、21世紀初頭には、あらかじめ録音されたCDによる伴奏も普及した。

そして、ある程度の規模の公演においては、企画構成吟（単に、構成吟とも）が行われることがある。これは、特定の主題のもとに複数の吟目が組み合わされ、ナレーションやBGM、舞台照明といった演出にも工夫が凝らされる総合的な舞台芸術である。

※参考文献 中村長八郎著『詩吟発達の歴史』pp.38-39

3. 吟道の理念

吟道光世流志清吟社の理念

詩吟は漢詩を吟詠することである。吟詠は漢詩の中に籠められた作者の心に共鳴し、それを自分のものとして思想を感受し、心から湧き出た感情を声に出して表現する芸術である。

※参考文献 宗主 橋本光世著『吟詩教本第2集』p.42

4. 講座について

講座参加時のお願いと持ち物

- ▶ 1) マスク着用
- ▶ 2) 筆記用具

*初めての方でも皆で声を出しながら、少しずつ進めて参りますのでお気軽にご参加ください。

講座内容

- ▶ 1) 詩吟のための腹式呼吸、発声法。
- ▶ 2) テキストで授業日の課題漢詩の読み方(書き下し文で読む。) → 内容理解。 ※テキスト内容は次スライドに一部提示
- ▶ 3) 少しずつ吟じながら、一題を習得。

庭上ていじやう一寒梅いちかんばい
 寒梅かんばい
 不爭ふじやう又不力ふたふちから
争争す 又 加めず

笑侵風雪開わらひしんぷうせつかい
 新島しんじま裏うら
 自占みづか百花魁ひゃくかのう
自ら 百花の魁と占む

吟道光世流志清吟社テキストより引用

寒梅

新島襄

庭上一寒梅

笑侵風雪開

不爭又不力

自占百花魁

*読み方

庭上ていじょうの一寒梅いちかんばい

笑わらつて風雪ふうせつを

侵おかして開ひらく

争あらずわず又また力つとめず

自おのずから百花ひゃっかの

魁さきがけを占しむ

*大意 寒さの中、庭に一本の梅の木がある。

風や雪に耐え、微笑むように花を咲かす。
競うことなく、又、自分の力を誇示しよ
うともしない。だが、自然にすべての花の
中で一番となっている。



寒梅

A plum tree in the winter

新島襄

Niijima Jo (a poet and founder of Doshisha University)

庭上一寒梅(庭上の一寒梅)

In the winter garden, there is a single plum tree

笑侵風雪開(笑って風雪を侵して開く)

It endures the snow and wind, while smiling and blooming

不争又不力(争わず又力めず)

It does not boast competition and power itself

自占百花魁(自ら百花の魁を占む)

Naturally, it becomes the champion of a hundred flowers

Translated into English by Kazumi Inoue.



5. 講師紹介

本名 井上寿美（かずみ） 吟号 彩世（さいせい）

母、祖母の影響を受け、11歳の時に詩吟を始める。
吟道光世流志清吟社 宗主 橋本光世に師事。

(賞歴)

平成11年ビクター吟詠全国コンクール	青年部 準優勝
平成18年ビクター吟詠近畿地区	一般一部優勝
平成20年ビクター吟詠全国コンクール	一般一部 準優勝

光世流志清吟社本部地区講師 修士八段

平成23年度ビクター全国吟剣詩舞コンクール指定吟集CDにて 折楊柳 を吹き込む。
李白、良寛、空海などの詩を好む。



授業風景（詩吟披露）

堺市立中学校勤務の後、現在、奈良教育大学大学院にて詩吟について研究。

機会があれば日本の伝統文化の普及に努める。国際交流、地域活動、小学校伝統芸能授業、中学校での授業内で児童や生徒に対して積極的に詩吟を披露し、機会があれば詩吟の指導を実施してきました。

※本講座のお問い合わせ 運営サポーター八木利津子（桃山学院教育大学）までご連絡ください。r-yagi@andrew-edu.ac.jp

6. 詩吟の実演

◇グローバル文化シンボル「鯉のぼり」プロジェクト



開会式にて詩吟を披露

7. 詩吟伝承に関する研究活動例①（参考資料）

和文化教育学会 第17回和文化教育全国大会集録 p5より

▶ 外国人教育における詩吟伝承の導入と活用性 –中学生の自尊感情の育成を試みて–

実践提供者 井上 寿美（堺市中学校）・共同研究者 八木利津子（桃山学院教育大学）

研究要旨

詩吟という日本の文化伝承を媒介（コミュニケーションツール）として、外国人教育に取り入れ日本人と交流を図ることで、和文化にまつわる理解を促進し外国籍の生徒等にとって日本文化に触れる機会が増え自尊感情の育成につながるかどうか検証する。

詩吟文化に触れた外国人生徒や教師を調査対象として自尊感情を「学習意欲」「活用可能性」「人間関係」の3観点でヒアリング調査により考察した。

その結果、コロナ禍で吟ずる難しさはあったが、寄り添い学習による文化伝承や和文化習慣の説明を通して和文化に対する理解が深まり学習意欲面の伸長が顕著にみられた。「人間関係」においても主体的に話しかける姿があり実践後は他者との繋がり感が高値に変容した。

また、外国籍の生徒が詩吟という学びを通じて心の安定をもたらす傾向があり、自己有用感に一定の効果が期待できることが示唆された。また、詩吟を介して生徒から主体的な対話が頻発したことから、詩吟はコミュニケーションツールとしての「活用可能性」が見出されたと考える。今後も詩吟という文化伝承を通して、グローバル化への寄与を目指し、多国間交流で生きる力を育むことや自尊感情の育ちに有用であることを明らかにした。

8. 展望～詩吟に関する研究活動例②（参考資料）

和文化教育学会 第18回和文化教育全国大会集録 pp.32-33より

▶ 「道徳科教育における詩吟伝承の導入と活用性」

—中学生を対象にした異文化理解と多文化共生—

実践提供者 井上寿美（堺市立中学校）・共同研究者 八木利津子（桃山学院教育大学）

研究要旨

本研究の目的は、詩吟という日本の文化伝承を道徳科教育に取り入れて、生徒と交流を図り、和文化にまつわる異文化理解を促進することである。そこで、外国籍の生徒にとって日本文化に触れる機会が増えることで、多文化共生の育成につながるか検討したいと考えた。

調査方法は、詩吟の実践的活動をイタリア語や英語のテキストを用いて道徳科に導入し外国籍の生徒の反応を観察するとともに、日本の伝承文化にふれる機会を増設した。

道徳の授業に詩吟体験を導入した結果、異文化理解について『考えることがよくできた・できた』が調査対象生徒の95.4%を占めた。実践後は生徒同士が互いの文化を受け入れる意見や考えを持ち、相手の気持ちを理解する思いやりが大切であることに気づく反応がみられた。出現語の分析による上位頻出語は、「文化」「国」「大切」「自分」「知る」と異文化の受け入れや多文化共生に直結する出現語が示され、詩吟の活用可能性が広がった。

今回の実践では、詩吟を母国語で伝承する経験や和文化習慣の解釈を通して、生徒間の国際理解が進むことがわかった。道徳という身近な教科活動などを通して生徒が詩吟という学びの教材活用により、異文化交流に寄与することが期待される。さらに、児童生徒がよりよく生きるために多様な学習場面に詩吟伝承を導入して、その活用性を追究することは有意義であり、持続的な取り組みが望まれる。